

令和6年能登半島地震におけるDMATの活動

DMAT 隊員（脳神経内科部長） 末田 芳雅



2024年1月1日16時10分、石川県羽咋郡志賀町を震源とするM7.6（最大震度7）の令和6年能登半島地震が発生しました。最大震度7は全国のDMAT自動待機基準に相当し、日直中だった私は救急業務を他の医師に引き継ぎ直ちにテレビに走りしました。先ほどまでの正月特番は一転しており、目にしたのは大津波警報発令中、建物は複数倒壊、輪島市で火災発生中、被害の全容は不明といった極めて厳しい状況でした。病棟勤務中であったDMAT隊員の廣田進看護師と携行物品を確認し、家族や各隊員と連絡を取り合い出動に備えました。翌日、まず中部ブロックのDMATが被災地に集結する事が決定し待機は解除されました。しかし、その後被災状況が甚大であることを鑑みて段階的に全国のDMATに追加派遣要請が行われ、当院にも1月11日昼過ぎに広島県より派遣要請が入りました。同日14時30分、末田、笠原春樹（看護師）、小川友輔（看護師）、長山幸司（事務）でDMATを1隊結成し2台の車両で当院を出発しました。

11日は陸路で10時間かけて石川県金沢市に移動し、翌12日10時にDMAT参集拠点である石川県七尾市の公立能登総合病院に参集しました。七尾市に近づくにつれ、徐々に道路や家屋の損壊が目立つようなな

り、地震の凄まじさを肌で感じるようになりました。能登総合病院には全国から集結したDMATが多数参集し物々しい空気を帯びていました。受付後、我々は穴水町（七尾市より北へ約20km）の穴水町保健医療福祉調整本部の指揮下で活動するよう指示されました。至る所で道路が寸断される中、唯一開通している国道249号線を通行し、激しい渋滞の中約20kmに約3時間かけて移動しました。

穴水町保健医療福祉調整本部では活動ポリシー「組織の垣根を越えて穴水町の医療関係者を支える活動を！」のもと、統括DMATの方を本部長としDMAT12隊の他、JMAT（日本医師会災害医療チーム）、主に保健師を中心とするDHEAT（災害時健康危機管理支援チーム）、DPAT（災害派遣精神医療チーム）、JRA T（日本災害リハビリテーション支援協会）、自衛隊、他多数の組織が活動していました。DMATは本部活動、病院支援、施設支援、避難所支援に分かれて活動し、我々は主に避難所支援として1月13日～17日の5日間現地で活動しました。

1月13日は避難所スクリーニングとして3か所巡回しました。地震の影響で道路の崩落や、土砂崩れ、激しい風雪による路面凍結および視界不良が加わり、どの



避難所にも辿り着くだけでも困難を極めました。避難者は高齢の方が多く、避難所によっては電気も水道も途絶え換気不十分な中、石油ストーブで暖を取らざるを得ない避難所、建物倒壊の危険性が指摘されているにも関わらず避難を継続せざるを得ない避難所もありました。どの避難所も責任者を中心に避難者の方々がお互い支え合い生活されている姿が印象的でした。しかし、ある避難所では数日前からしゃべりにくさ、左上肢の動かしにくさを自覚する中、頑張っている責任者の方がおられました。脳血管障害の可能性も疑われ、本人に説明して救急車を手配しましたが、被災地内の病院では対応困難であり約 80 km 離れた金沢医科大学病院に救急搬送となりました。

2 日目は福井県 JMAT(医師会チーム)、静岡県 DHEAT(保健師チーム)と一緒に避難所を巡回しました。事前情報では COVID-19 患者さんを始め発熱者多数という事で、感染対策をしっかり行い入館しました。しかし、実際に巡回すると既に災害支援看護師が介入しており、COVID-19 患者さんは 1 名で全身状態は安定、感染拡大に配慮された環境調整もされていました。他の避難者の方々も全身状態は概ね安定している様子でした。ただ、長期避難により身体的・心理・精神的な不活動でフレイルに陥る方もおられ JRAT(日本災害リハビリテーション支援協会)により後日介入されました。

3 日目は病院支援として穴水総合病院の救急外来の日勤を担当しました。幸いにも救急搬送される方は少なかったですが、近隣の施設より COVID-19 感染の方が救急搬送されました。中等症でしたが通常であれば初期対応後、同院で入院加療となりますが、病院自体が

被災し断水していましたので、金沢医科大学病院に転院搬送となりました。

4 日目は宮城県 JMAT、静岡県 DHEAT、福井県薬剤師会と合同で避難所巡回に行きました。避難所内での多数の COVID-19 患者さんの診療や、感染拡大防止、転倒予防の観点から責任者の方と居住スペースやトイレ設置場所等の環境についての相談を行い、最終日には 2 日目に訪問した避難所へ再訪問した後、小学校の教室を利用した避難所での診療を行いました。明日以降の活動方針に活かすべく、本部に避難所の現状報告および現場で感じた事項を報告し我々の全活動を終了しました。

なお、最終日は活動期間中、唯一の晴天日でした。綺麗で穏やかな海の見える小学校の避難所ではグラウンドで炊き出しが行われており、喜んで集まってくる子供たち、支える保護者の方々、その様子を見守る高齢の方々の笑顔がとても印象的でした。極めて厳しい震災ではありますが、5 日間の活動を通じて被災された方々が手を取り合いながら前を向いて生きていく力強さと、医療のみならず各業界から集まった方々の、被災された方々のために一生懸命に活動される姿がとても印象的でした。「何としても一日も早い復興を」と切に願いつつ帰路に着きました。

最後になりましたが、令和 6 年能登半島地震により亡くなられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

